

芸術か、貨幣か？

—ドイツの金融機関における現代写真コレクションの美学

鮎川真由美 (近畿大学)

現在、Deutsche Bank や DZ Bank、ドイツ証券取引所など数々のドイツの金融機関で、アート・コレクションを通じた活動が活発に行われている。それは作品収集に限らない。フランクフルト・アム・マインに立地するこれらの銀行の、神々しい高層建築の空間内に展示されたその作品群は、なによりもまず、職場で働く人々のために展示され、働く人々と〈ともにある〉。さらに、それらは顧客、そして一般の訪問者にも無料で公開され、作品を前にした、アート部門担当キュレーターによる紹介活動も積極的に行われている。また、とりわけ現代写真のコレクションの選択やその拡張に力を注ぐ金融機関が目立つ。

フランクフルト学派第一世代とも縁の写真家ジゼル・フロイントは、現代では、あらゆる事柄に通じた人間のことを「目が開かれている」と言う、と指摘した。まさに各銀行は、現代写真のもつイメージの力、およびそのコレクションという、いわば文化資本を通じて、人々の、現代アートという領域を超えた、世界への、新たな目が開かれることを企図しているのだろうか。

他方で、たとえばアンドレアス・グルスキーによる、各国の取引市場を写した一連の写真を、まさにドイツ証券取引所は保有し、展示している。この場合、資本主義社会の象徴的トポスともいえる取引市場は、グルスキーの大型写真の被写体であり、同時にまたその〈大型の〉買い手ともなっているのである。周知のように、しかし、金融業者の扱う主たる商品とは〈貨幣〉である。このような、企業における〈芸術作品〉コレクションは、その企業戦略のなかでどのように位置づけられるのだろうか。これは、〈価格〉という〈価値〉の増大を狙った投資対象でもあるのだろうか。

ここで、あらわになるのは、「芸術か、貨幣か？」という、新しくて古い人類学的問いである。しかしながら、本研究発表ではドイツの金融機関のアート・コレクション、なかでも〈写真〉という複製芸術のジャンルに絞って検討する。金融機関が社会のなかで果たす媒介的機能やその経済的ヴィジョンを考えあわせたうえで、浮き彫りになるとみられる、その現代写真コレクションの美学をめぐる論じてゆく。